

資料紹介

架蔵『直能公御詠歌集』

解題

肥前小城藩第二代藩主鍋島直能（初名、直宗。一六二一—一六八九）は、父元茂の後を継ぎ、学問や諸芸道への関心も強く、公家とも広く交流したことが知られる。直能の生涯を記す『直能公御年譜』（佐賀大学附属図書館所蔵、享和三年（一八〇三）岩松相延記）によれば、寛永十六年（一六三九）四月に十八歳で歌・蹴鞠両道を飛鳥井雅章（一六一—一六七九）に入門し、以後、雅章を始めとする堂上歌人との和歌を介したやり取りが見られる。寛文元年（一六六一）二月二日、直能四十歳の折には、北野天満宮の能貨から二条流の古今伝受を相伝された。^①直能は、領内の景勝地桜岡を詠じた和歌の後西院はじめ親王や公卿から募い、『岡花二十首』としてまとめたほか、この二十首に後水尾院の一首を加え、桜岡十景の漢詩文と合わせた『八重二重』を編んだ。また、『夫木和歌抄』の類句を集成し『夫木和歌類句集』（七十一巻）を成すなど、多芸に秀でた姿が偲ばれる。^②

『直能公御年譜』冒頭の「凡例」には、次のようにある。^③

公、朝覲の御暇、風月に御心を寄せられ、折にふれては雨の夜冬の朝^{あした}の御感吟、或は旅泊懐旧の御詠歌等、「田心集」に見へたる十分の一二を挙て之を録す。又、御別業において詩客文人を被相集、御遊宴の辞藻或は桜岡御取立の次第、其大略を挑て、御譜中所々に之を載す。

残念ながら、「田心集」なる歌集は現在目にする事ができず、これまで

日 高 愛 子

『直能公御年譜』に抄録された「田心集」の一部などから、直能の詠作活動の一端を窺うはかなかった。

そのようななか、このたび思いがけず佐賀県唐津市の西海洞書店から『直能公御詠歌集』と題する写本一冊を入手することとなった。縦二六・二糎×横一八・〇糎。袋綴本。表紙題簽に本文と同筆で「直能公御詠歌集完」とあり、一丁表左肩にも「直能公御詠歌集」と墨書される。二丁表及び一八丁裏に「臬図書」の長方朱印（三・二糎×一・五糎）があるが、未詳。巻末には次のようにある。

右御詠歌、御年譜のうちにあるを、太田雄増が抜書しをかりて、明治十あまり二とせの六月七日より八日に謹て写しする。／貞起

ここに見る通り、本書は、『直能公御年譜』採録歌のうち、一部の他人詠を除くほぼ全てを網羅的に収録している。ただし、年譜の年次には従わず、元旦から始まり、四季、追善和歌の順に配列し、末尾に桜岡の茶室の銘などを載せている点、再編の際に歌集として一応の体裁を整えたことがわかる。

再編者の太田雄増は、太田増雄の誤りか。今泉蟹守編『類題白縫集』（佐賀県立図書館所蔵）に太田増雄の名が確認される。^④佐賀藩家老太田鍋島家に関わる人物かと思われるが、未詳。本書を写した貞起とは、中野数馬（政利）であろう。貞起の名も『類題白縫集』に認められる。『類題白縫集』

姓名録端書（佐賀県立図書館所蔵）によれば、初名、貞傑。文政六年（一八二三）七月十六日生、明治十八年（一八八五）五月三日没（六十三歳）とある。すなわち、明治十二年六月、貞起五十七歳の折に太田増雄から『直能公御年譜』の詠歌拔書を借用し、『直能公御詠歌集』として転写したのが本書である。当時まだ世に知られていない『直能公御年譜』から編まれたものであり、再編とはいえ、直能の唯一の歌集として貴重である。

注

（1）井上敏幸「直能の和歌」（白石良夫・青木歳幸編『小城藩と和歌／直能公自筆／岡花二十首和歌』の里帰り）佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一三年。初出「元禄文学と『葉隠』—武士道と歌道—」『葉隠研究』第49号、二〇〇三年三月、拙稿「飛鳥井雅章と鍋島直能—「道」の相伝と和歌—」（『佐賀大國文』第43号、二〇一五年三月）。

（2）注1井上論文に詳しい。注1『小城藩と和歌／直能公自筆／岡花二十首和歌』の里帰り）に『岡花二十首和歌』『八重一重』が翻刻される。

（3）本文引用の際、句読点等の表記を私に改めた。なお、『佐賀県近世史料』第2編巻1集所収の翻刻には和歌の誤読が見られる。

（4）注1『小城藩と和歌／直能公自筆／岡花二十首和歌』の里帰り）所収「今泉蟬守歌文集」小城関係者一覧」参照。

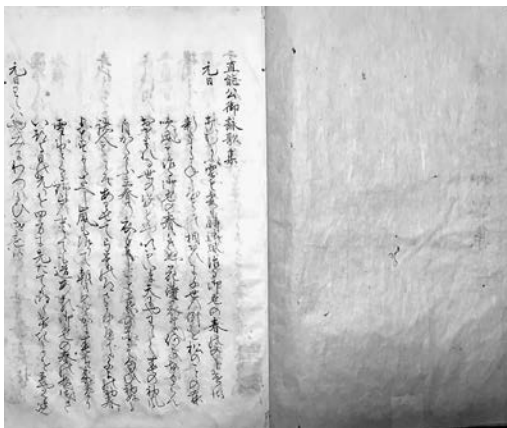
（5）小城藩第六代藩主鍋島直員の長男直嵩の詠草に小城鍋島文庫蔵『続田心歌集』（写本一冊）がある。直能の歌集「田心集」を踏まえた命名であろう。成立は明和（二七六四—一七七二）の頃であり、この頃まで直能の「田心集」が伝存していたことが知られる。

〔付記〕本稿を成すにあたり、白石良夫先生よりご教示いただいた。記して御礼申し上げます。なお、本稿は、平成二十七年科学研究費・基盤研究（C）15K02251（研究代表者＝中尾友香梨）による研究成果の一部である。

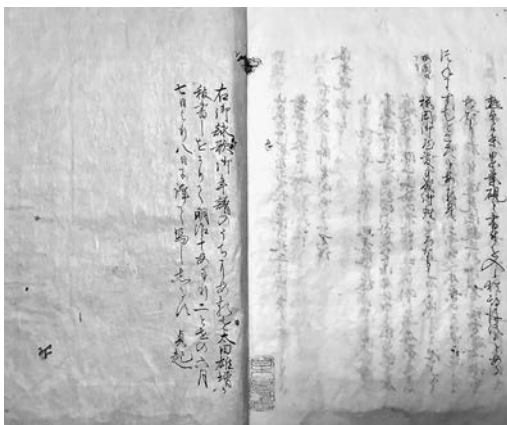
表紙



巻頭



巻末



巻末印



凡例

- 一、算用数字で歌番号を付した。
- 一、原則として現行の字体を用いた。
- 一、誤記と思われる箇所には（ ）で修正を示した。
- 一、朱書はゴシック体で示した。
- 一、丁数を「(1才)」の如く示した。
- 一、挟み紙は□で示した。
- 一、『直能公御年譜』等に基づき、詠作年や直能の年齢、人物などの注を付した。

翻刻

直能公御詠歌集 完 「(表紙)

直能公御詠歌集 「(1才)

(空白) 「(1ウ)

直能公御詠歌集

元旦

- 1 打むかふ雲も霞も時津風治る御世の春ののどけさ
- 2 新たまる年とやどゝの相おひに千世の例を松のことの葉
- 3 吹風も治る御世の春はきぬ花待かほに何かおもはん
- 4 おさまれる世の姿とや吹もいま天にやわらぐ春の初風
- 5 自からけふ立春の衣手にこと葉の花ぞ匂ひ初ぬる

- 6 諸人もこゝろあわせて弓筆の道さかゆべき千よの初春
- 7 よもすがらさへし嵐も治りて朝日のどかに春ぞ来にけり
- 8 雪氷とくる野山の末とても道あまる御世の春の長閑さ
- 9 いづる日の光りを四方に先たてゝ明らけきよを春やみす覧
- 元旦、わらはやみにわづらひければ「(2才)
- 10 吹入てすだれうごかす匂ひより世は春なれや梅の下風
- 隠居し侍りての元旦
- 11 いはふぞよこのあら玉のことしより世をゆづり葉の宿の栄を
- 12 長閑なる身にまでなりぬことおふきよを新玉の春を迎て
- 年のうちに春立ける元旦
- 13 年のうちは名のみばかりに立春の今朝は霞の衣重ねて
- としの内の立春、池をほり侍りて
- 14 千代すまん影も見へけり年の内に春せき入る宿の池みづ
- 桜岡にての立春
- 15 朝日かげさすや岡辺の松の戸を明れは春と立霞かな
- 二日、松原にあそびて「(2ウ)
- 16 ときわかぬ松ともいわじうすくこく春は若菜の色の一入
- 院の御所に参りける日、立春の日なれば
- 17 春の色を緑に見せて洞の内のめぐみにしるし千代の初風
- 正月十一日、江戸御城御会始
- 18 世にみてるみどりの松や千々の春天伝ふ日の長閑なるやま
- 19 あさがすみへだてぬかりの峰こゑてかへす頃なり湊田の春
- 20 川水のすゑもこほりやとけぬらん竹の葉渡る風のしづけさ
- 21 霧なびく軒端の月はほのかにてむすぶや白き露の玉だれ

氷解

22 日の移るかたはこほりてかつ解^のてしるしおとせぬ山川の水

鶯

23 なべて世の春にしらぬ谷の戸も明る光りにうぐひすぞ鳴

残雪

24 山の端の松のうれ葉の白雪は花と見よとや消のこるらむ」(3才)

雪ふりければ

25 豊年の光りを見せて降雪に民のこゝろの春に嬉しき

山里に住侍りけるころ

26 住ずして誰かはしらなくばかりしづけき山の奥の心を

梅の盛りなりけるに独りごちして

27 色も香も誰にか見せん山里の軒ばに匂ふ梅の盛りを

又、山里にあそびて

28 山は霞梅はのきばにかつ咲て色香も深き春の山里

春雨

29 小田かへす民の草葉も恵あるこの春雨や如何に嬉しき

花盛

30 咲にほふ花より花に埋れて外に求めん岡の辺の春

おなじ折、雨ふりければ」(3ウ)

31 雨もよくぬれて色そふ山桜しづくも花に匂ひこぼれて

わづらひしころ

32 春のきるかすみの衣たれこめてまぢかき岡の花をだに見ず

庭花

33 ゆきて見む四方の梢の盛りをも庭の桜の色にこそしれ

岡花の禁中に聞しめしたりと、人の物がたりし侍りければ

34 植置し岡辺の桜色はへて雲に匂ふ宿の春かぜ

明暦天皇より汝が望請ふ所の岡花の御製なりと云々。御製

35 咲花にまじる岡辺の松の葉はいつとなきしも色をそへつ、

右新院の御製をはじめ、聖護院の宮其外、「岡花」といふ題にて各御詠歌あ

りけり。公も

36 言の葉の匂ひにそひて咲つゝ花に嬉しき岡の辺の宿」(4才)

花は木ごとに咲て、つゝにこゝろの山をかざり、露は草葉よりおちて、こ

とばの海となる。されば、一と年、岡の花の色香、外よりことなるよし、

都の人々かたり侍りしを、いかにしては、院に聞しめしあげさせ給ひけん、

いともかしこに、勅^きありて、「岡の花」といふ題にて、御製の和歌をくだし

給りぬ。それより月卿雲客おのゝ詞のにはひをそへ、照光門主詞花を、

み山の春風にひしき^{ひしき}、筆を白川の流にそゞぎて、後の序をか、せ給ふ。ま

ことによるこばしからざらんや。ゑたのしからざらんや。今年なほ麓の野

辺に桜を植、山のおもむきをあらため、水のおきてをかへ、池の辺には五

葉・紅梅・藤・款冬・岩躑躅やうの花共をうへ、春ごとの花の盛りには、

こゝろの花もよそにちらさで、日をくらすと^{とに}になん」(4ウ)

37 岡の辺の宿をさくらにすみなすや心の花のこのめ春風

38 雲の上の光りをそへて咲匂ふ岡辺の花のいろそことなる

39 見せばやな八重もひとへも桜咲岡辺の花の春のにしきを

岡山の蔵王堂の花盛りに

40 枝かわす松のときわに色そひぬさかりことなる花の光りに

又、蔵王堂の糸桜を

41 糸さくら見に来る人のことの葉を結びとゞめよ花の色香に

「後といふ深山さくらのさかぬまに見よとて手折花の一枝」と光茂公御読、
一枝を手折て、「そなたの花はいつごろにや尋ん、きかまほしく」とありけ
れば

42 一枝のなさけなりけり花の色を見よとておくる心こと葉は」(5才)
弥生廿二日、旅行のとき

43 とし毎のわかれは春にならべどもなぐさめかぬる旅の空哉
廿三日、山をこへけるに、古郷のかたを詠て

44 立かへるこゝろぞつらき古郷の木末は見しと思ひしものを
廿五日、はかなき旅の宿りにて、いとまどろまれぬに、風さへはげし、
有明の月くまなくさし入ければ

45 旅衣かたしく袖に有明のつれなくやどる影もうらめし
長門国宝富といふ所の普賢堂の柱に、愚溪居士書置し筆のあとあり。今は

なき人となり、哀れに涙もとゞめられば、おなじ柱に書付侍る

46 かき置し筆のすさびはそれながら人はなき世の涙也皚
弥生旅立けるに」(5ウ)

47 春に行雁をばいはし旅衣我も古郷の花にわかれて
轟木といふところにて

48 古郷をいで、一夜は中々に旅ねの床のうさもめづらし
豊前国ゑい野といふ所にとまり侍りけるに、大雨ふり、河水まさりて「渡

りもなし、逗留せよ」といひさわげば、神に祈りて
49 いのるより空吹はらへ旅の道おもひしなどの神のめぐみに

50 神風に雨のやへ雲吹はらへ物うき旅のあわれおもわぬ
雅章卿東部よりのぼられしに、とづかといふ所までいひをくりける

51 このたびはさこそ心につもるらし頃も五月の雪のふじのね

右返し

52 ふることをおもひいでつゝむかひ見ん五月の空のゆきのふじのね
赤間ヶ関に舟をかけて四五日漂泊し侍りけるに」(6才)

53 春の日のながとの海にふねとめてこゝろうきねを重ぬべしとは
おなじところの阿弥陀寺にもふで、幼帝の像をおがみ奉りて

54 雲の上にすむべき月のいかなれば波にしづみし影と成けん
卯月廿六日、江戸を立て、かな川といふ所にやどりて

55 旅衣けふ立いで、草まぐらかたしく袖ぞいとゞ露けき
箱根山をこゆるとて

56 つゝ、し咲箱根のみねに一夜ねてあけてぞこゆる足柄の山
おなじ山の峠より富士を見て

57 足柄の山はさながら麓にて雲より上は雪のふじのね
鳴立沢にて

58 むかし思ふ鳴立沢の夕暮は秋ならぬ夏もあわれしられて」(6ウ)
うづき廿九日、東部よりたび立とて

59 しばしまて春は来て見ん関の名の霞のころも立へだつ共
60 旅衣日もかさならばいかならんまつ袖ぬらす武蔵野の露

ゆたかなる文のとし、十といひつゝ、二の五月八日旅立けるには、空曇りて
風もなし、はるゝと野をすぎ、あるひは杉のむら立木蔭涼しく行て、わ

らびといふところに昼休して、ひる過るほどに宿を出ゆくに、賤が垣ねに
咲つゝく卯花は雪のごとし

61 咲つゝく賤が垣ねの卯花は袖寒からぬ雪にぞ有ける
と口すさび過る。兼而は上尾といふところにとまらんと思ひしに、かの五

条あたりの夕顔のやどりにも過てあわらなれば、それより一里を行て桶川

といふところにやどり侍ける

あわら

あはれカ

あはらカ

※ 「(7才)

62 あわれとも思へ旅寝の草枕露もなみだも袖にこぼれて

十日の空も又くもり侍りけり。日いづるほどに宿をいで、野くれ里ゆき
過て、熊谷といふ所に昼の休みし侍りける。その里の中に熊谷寺といふ
有。直実が住し跡とて、手づから作りたる像も有。供したるものども打む
れて見にもふでぬ

63 武士のこゝろにつよき梓弓など引かへてすみ染の袖
信濃国諏訪といふ所にて

64 ゑにもかくうつさまほしやすはの海の波間に浮ぶ富士の芝山
おなじ国の駒ヶ嶽といふ山に、雪いとしろふ見へければ

65 時しらぬ類ひなりけりこれも又夏にしらぬ峰の白雪

諏訪の神に夜詣て、月のおもしろかりければ「(7ウ)

66 あふぐなり昔も今も曇なき神の恵みの月にしられて

臨泉庵にて

67 いほりさすこの谷川の清き瀬にすめばこゝろのちりも流れて

中津川にて蜩を

68 閨の内にあつめし夜半の名残とや旅の宿りをとぶほたるかな

不破の関にて

69 あわれなり不破の関屋は名のみにてもるてふ月の軒ばだになし

70 ふわの関人はのきばの跡たゑてしげる木の間に月ぞもりくる

月岡といふところにて

71 花のひかり月の匂ひもこの夕実をしむべき春の一時

おなじ所の瀧を「からこと」、名づけて「(8才)

72 瀧の糸を今からことに引かへてしらべあわせる峰のまつ風
帯河の辺にて、谷川といふことを

73 谷川のよどみにうかぶ月影はながれもあへぬこほり也けり

滑稽亭にて

74 むすび置庵は門田のいなむしろしく物もなき月を見る哉

桂の亭にて

75 あやにくに降雨もよし名にしおふ秋を心の月し照さば

詠帰堂に逍遙して

76 時鳥をのが鳴音のことわりを帰てぞしる古郷のやど

亭を「隣月」と名づけて

77 雲うづむ深山の奥にのがれて月を隣りに杉の下庵「(8ウ)

卯月十日あまり、春花亭に独ごとに

78 かくばかりみいれいやしき住居にも心長閑に世をぞ楽しむ

くれがたき夏の日、そのこと、なく文ども見る中に、寂蓮法師の題に「人
すまぬ鐘も音せぬ古寺に狸のみ社鼓うちけれ」と有も所からおかしけれ
ば、この亭を「狸鼓」と名付て、歌の文字を上におき、山家のこゝろを戯

に筆をだにとりあへず書付侍る、老の後の徒らごとになん

79 引むすむ草のいをりの松の色をしらでやとわぬ杉たてる門

80 ともにきく人社なけれこの宿の軒端にきゐる鶯のこゑ

81 杉たてるしるし計ぞとふ人も待こともなき山蔭の庵

82 まれにきてとひ来る人もなき霜をいかに水鶏の門た、くらん「(9

才)

83 照月の光りを峰のよそに見て待ほどおそき山の下庵
栗谷にて暮景を

84 麓にはゆふ霧ふかく立こめて賤がすみかも見へず成ゆく
香雲橋にて

85 春は花秋は紅葉の色に香におもひぞ渡る雲のかけ橋

夏のころ怡顔室に侍りけるころ、雨そほふりて、いとしめやかなりけるに、
蟬の声おもしろかりければ

86 雨そ、ぐ木々の梢に風過て露にみだる、蟬のもろ声
松菊亭にて

87 ことの葉の花に契りて幾秋もこゝろに匂へ庭の白ぎく

88 あひにあひて一重のみかは八重菊の色香にこもる松の下庵」(9ウ)

宿花堂にて花を見て、詩歌の会ありしに

89 咲つゝく梢のみかはこの葉の花にも宿る春の山ざと

渋谷といふ所に閑居し侍しころ、春雨の空に梅の露に匂ひければ

90 打けむりふる春雨の露の玉くだけで匂ふ梅の下風

おなじところ侍りけるころ、金王が植たる桜を見にまかりて

91 朽残るおひ木のさくら幾春か花もむかしを思ひいづらん

「桜岡二十景」の詩、林家の諸学士、序跋并詩歌共に集いち帖とじ、「八重
一重」と号し、其書の奥に

92 もしほ草かきあつめたる嬉しさの袖にも身にも余りてぞ思ふ

ふ月四日、旅立けるに、空は打曇りて、いとゞ秋の初風身にしみ、立いで
ん空もなきに、人々なごりを、しみければ」(10オ)

93 したふより猶ぬれ増る旅衣かゝるなみだの袖のわかれを

94 これもまたかのこまだらの色と見る都のふじの峰の白雲

右の詠は、矢橋の舟の中にて折ふしを讀いだしたる也。たゞにはと飛鳥井
亜相へ見せ侍りしかば、感にたへて珍重この一首なりと寸かへされし也。
しかるを書とめて置ぬほひなき無念なりとて、跡をたづね大坂まで書付て
くれよとありし故、染秀筆のぼせ侍りしなり。

おなじ折、田子の浦にて

95 汲しほをはこぶにおもき影見へて富士をもにのふ田子浦人」(10ウ)
この詠を日野弘資卿に点作被頼ければ、近きころめづらしく珍重、二四の
句聊の置替、如此候ては如何、「くむ塩に移れる富士のかげながらにのふや
重き田子の浦人」

旅泊

96 明ばまたいかなる磯にうきねせむ行衛しられぬ梶枕して

97 吹まざる嵐もうしや波枕又やうきねの夢にわかれん

98 世を渡るわざもかくこそ行船のしたはあやうき浦の波風

浦月

99 明石がた浦風清く雲晴て磯辺の波に月ぞくどくる

100 須磨明石幾秋かけて海士人は波の千里の月や見るらん

101 こゝろなき蟹も今宵は舟とめて最中の秋の月や見るらん

十五夜月

102 さやかなる光りを峰に匂はせて山のは登る月ぞ名だかき

103 をしなべてあふがざらめや月の秋あきは今宵としるもしらぬも

104 をしなべて月や見るらん名に高き秋の今宵はしるもしらぬも

おなじ夜、桜岡新亭より月を詠

105 幾秋もなれて杜見めこの宿に名高き月の影を待へて

かりへし ※」(11オ)

八月十五日、鷺嶺の大徳、予がわらわやみにわづろふよしを聞給ひて、と
むらひおはし侍りて、詩をおくられ侍し返事

106 たれこめてうしやつらしも法の道の秋の花野の月を更せて

萩吹風のおどろかしげに、今宵は十五夜なり。わらはやみにわづらひて、
秋の行衛だにしらず

107 ことしわれいかなることぞ春秋の花と月との盛りをも見ず

山家月

108 ことしげき世をのがれこし柴の戸に思ふくまなく月を見る哉

九月十三夜

109 水の面にかぞへし秋の光りより猶長月の影のさやけさ

110 見てる夜もおなじ光りとあふぎ見るけふのこよひの月のさやけさ

駿河国にてはからのなき跡を見て

111 ながむれば空もなつかしなき人の烟ときへし跡のしら雲「(11ウ)

112 いきて今こゝにしあらば夜もすがらさぞ古郷のことかたらなん

落葉硯

113 幾年かつもる落葉の又もよにたぐひはかたき石と成けん

武蔵の国へは年をへだて、住はべりけるに、神無月まで御いとまいでざり
ければ

114 おもひきや時雨の雨のふる里に神無月まで帰らざるとは

青山といふ所にまかりて、松の雪のことなる興にめで、「とへかしなまつ
とし聞しことの葉も松にしらるゝ雪の朝たを」と光茂公より御短冊たまわ
りければ、一首御詠珍重々々。疑は是雪裏の鶯不侍春して発其吟乎、臆庭
の寒梅向暖而独り花さく、其詞吟詠して無指何以述之、万般以心長して紙
短束て閣而已

115 言の葉もまつにしられて白雲のかゝるや花の色に見すらん
つねにすむ所はやけて、田舎に侍りけるころ」(12才)

116 梅が香はむかしながらに匂へども宿社かわれ料の春風
梅園亭にて人を待て

117 諸人を待へて咲もこゝろあれや後とをしへし庭の桜は

明暦のころ、人の身まかりての又のとし、かたみの夜のものを見て、懐旧
のこゝろを

118 今更にかたみとや見む唐衣みし夜の夢を思ひあわせて

幻心童女百ヶ日にあたりければ

119 おもひきやさてもみ法の花にいま老の鶯ねをなかんとは

緑樹院一回忌に、人々五十首の和歌を供養しける中に、空より花の

120 この寺のけふのほとけのみのりには空より花の匂ひこぼれて

にしにこゝろを」(12ウ)

121 今日猶西にこゝろをしたふかな涙の玉の行衛たづねて

むなしと、ける

122 月花にこゝろとめてやながめまし空しと、けるおしへ聞ずば

母の三十三回の歌読で、尊師のもとへつかはしける

123 のほるべき花の台ぞみそのやの三の車のりにひかれて

高岳院月清日善大姉、雲にかくれ給ひよりこのかた、春のあした花の散を
見、秋の夕暮に木葉の落るをき、草の露、水のあわれ、こゝろにたゆる
ことなし。しかはあれど、年月おこのふわぎは、みな法の師にゆづりて、
いさゝかみづからのなすことなし。いかにしてか志をのべ侍んと、時しも
神無月、野山のけしきになぞらへ、錦歌とかやいふことをつゞりぬ。誠に
花に鳴鶯、水にすむ蛙の声などいへるに」(13才) 似たり。さらば、人にい

ひつたゑんとはあらず、只なきかげの前にさしも侍らんとおもふばかり
こそ
124

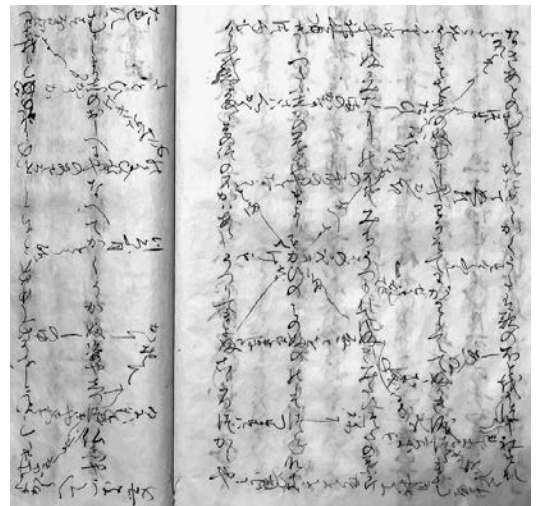
なきあとのむなしきためとくうたは歎のほどをうつし社すれ
みぢつぬでかくはあしきれむけ
そこじまぬ
うきことをしのかむかしやわがそでにかわらでてふき涙つゝまむべ
かりひたのぶむかしやわがそでにかわらでてふき涙つゝまむべ
しりしひか
時まふかまたにのほそみちうづもれて風ふきみだれたの葉か
神の露のほそみちうづもれて風ふきみだれたの葉か
無の露のほそみちうづもれて風ふきみだれたの葉か
つなかの蓮生のやまよりかひのみのりぞつねなき
きつたふしかの蓮生のやまよりかひのみのりぞつねなき
ゆか心はさなどくへひのみのりぞつねなき
もたらか心はさなどくへひのみのりぞつねなき
けふぞしるたゝその俣のほかはあらじうつりてまよふころつかに
れたとげきなみだの
むかしよりしのおしへにやなべてかくうかふ姿やしつつかしやう
すれほすむかしよりしのおしへにやなべてかくうかふ姿やしつつかしやう
けす社りつうの影しみのほかにちうのめゆてめとをしむらむらつきげな

「(13ウ)」

辞世

125

独ねの閨のともしび吹消て我影にさへわかれぬるかな
(6行分空白) 「(14才)



桜岡二十景

桜岡花雲 温山朝露 吉田鳴鵲 夏林翠密 川上長流
祇園河月 岩藏曉鹿 遠城薄霧 松尾霜葉 円通疎鐘
今川流螢 水上帰鴉 金立秦祠 賀瀬水村 西嶺斜暉
珠簾匹練 阿蘇晴烟 三岳岑府 牛津遠帆 天山秋雪
桜岡十境

偕楽門 竹下径 嵐白園 碧瓦楼 百魁墩 風浴亭

範馳園 拾葉庵 換鶯亭 桜岡館

常葉園六境

常葉四栄 帶川氷輪 銀濤静音 和斯石炉 養花香井

焰魔幽堂」(14ウ)

薰山十五境

宿花堂 香雲橋 乾濤林 薄霧園 杉径 鹿陂

栗谷 掬泉庵 覚鸛窓 松菊亭 紅葉墩 味月阜

宜雪亭 霜筠壑 常春圃

右の御歌の題は後世の人しらざることも有しに付左にしるす。

山里に住るとあるは

鯖岡へ御越御逗留中の御作也。

明暦天皇より汝が望所とあるは

延宝三年乙卯四月廿日、大猷院殿廿五年御忌、東叡山にて御供養有。

右御法会に付、聖護院宮道晃親王、江戸へ御参向、御序に、明暦天皇

の宸翰の御懷紙を、直能公御拝戴有。此時、親王勅命を伝へて曰、是

汝が望請ふ処の岡の花の」(15才) 御製也と云々。右に付、六月二日、

禁裏へ為御礼被成御献上候に付、長橋局より御奉文、又、新院御所女

房の御奉書有。明暦天皇は、百二十代の天子後西院の御事にて、寛文

三年に御位をすへさせ給ひ、当時、仙洞にましく、新院様と奉称候。

このたび、新院の御製をはじめ、聖護院其外十八人、「岡花」といふ題

にて各御詠歌あり。右御和歌を集めて、その奥に道晃法親王に乞奉り

て、跋を書しめ給ふ。

肥前の国に佐波といふところあり。其国主のゆかりの人、しるよしし

て、行て住けり。山水海岳の遠望、似たる所なきに、桜をうへて、年

毎の花の盛りには、けふじあへり。さるにより、「桜岡」と所の名を改

め、「岡花」といふ題にて、さるたよりありて」(15ウ) ほどは雲井の

人々に大和歌をす、め、新院御製をはじめ、懷紙あまたになりぬ。し

かあれば、あるじのをもくわへ、をの／＼筆の跡を一帖として、来由
をしるすべきよしありしかば、いなびがたくて書つけ侍りぬ。誠に鳥
の跡たはず、歌の道もまさきのかつら、ながくつたへて、後の人にし
らしめんためなし。

二品道晃親王

桜岡、往昔は「鯖岡」と号し、麓に岡村と云民家有に、今、永岡・下
岡といふ名残れり。月堂様、御領中御巡見の序に、御見立置れ、末々
御隠栖にも可成思召に而、榛棟を刈て、岡の上に御茶屋相立られ、桜
を数株御植おかれし。其御志を継れて、直能公も明暦・万治の頃より、
所々に御茶屋を立られ、雅名」(16才)を付させられされ、桜紅葉を吉野・高
雄より御求植させ給ひて、御在国の節は毎度西丸よりこの所に御越御
逗留被成けるなり。右、禁中の御製をはじめ、月卿雲閣の詠歌有を以、
是より日本名所の部に入と云々

豊前国多良御川とは

右御歌、御詠候成候得共、忽雨晴てことゆへなく御渡り被成候也。

臨泉庵にてあるは

上ヶ松より須原の間に寢覚の床と云名所あり。其辺に寢覚山臨泉寺と
いふ禪寺有。庭よりね覚の床見下し、地景残らず見ゆ。浦島が釣場の
石ともふし伝ふる有。大木の榎有。」(16ウ) 直能公御自筆にて、「此と
ころにうらしま太郎がつりぶねあり」と遊ばし、御掛ヶ置れたり。是
より木曾路往還の旅人、この御書付を見て立寄、貴も賤もこの所に足
をやすめて、この庵室に参詣し、奇石怪岩あることを始めて知しより、
自然と禪庵も再興のちからを得、また其辺にありし民家も始の程はわ
づか四五軒のわらやにて、旅客の腰を懸べきやすがだになかりしに、

こ、かしこより人もつどひ集りて、今更はね覚村といふ数十軒の宿となりけるも、直能公の御筆を残し置れしより、かく繁栄の地と成けると、其所の老翁のものがたりしとなり。当時、其御筆は額に誘らへ、其寺の門にかけてあり。」(17才)

月岡とありけるは

岩蔵川明測の辺に御茶屋、明測に移る月を御覧あるから、月の岡の御茶屋と御名づけ候也。

滑稽亭とあるは

丸山の近所にて、丸山は御家中の若侍を召集められ、これを築しめ給ふ西の岡の地にあり。小山也。田家御茶屋と号するなり。偏に民家の様体なり。蓑笠・鋤・鍬の類、農具共を掛けならべ給へり。

桂の亭とあるは

福寿堂あり。三聖堂あり。芳桂亭といふなり。

狸鼓亭とあるは」(17ウ)

山家の御茶屋にて、松香溪の北、正法山の辺に有しか、また鷺原御茶屋にや、不分明なり。

右以外の月卿雲閣ある所、不詳。

落葉硯とあるは

山より堀いだせし石なり。照光院宮様へ、公より、御家に伝り候木葉硯御覧に入られ、何とぞ名を御付被下候様、御願被成。右硯は、往昔深山幽谷の中より出るものと見へ、木葉年々に落積りたる末、千歳を経る自然と石に成たるに、池をほりつけて、中を硯に用たる奇物也。木葉のかたあざやかに見へたり。右に付、道見法親王の御書、珍敷硯一覽令祝着、この硯に名所望の由、不手馴義にて無調法候得共」(18才)

懇望候条、落葉硯と書付進入候、猶期後信候とある物なり。つねにすむところとあるは

桜岡御屋敷被成御座ころなり。

(7行分空白)」(18ウ)

右御詠歌、御年譜のうちにあるを、太田雄増が抜書しをかりて、明治十あまり二とせの六月七日より八日に謹て写ししるす。

貞起

」(19才)

(空白)」(19ウ)

注

- 1・2 延宝四年(一六七六) 元日、直能五十五歳。
- 3 延宝九年(一六八二) 元日、直能六十歳。
- 4・5 天和二年(一六八二) 元日、直能六十一歳。
- 6 天和三年(一六八三) 元日、直能六十二歳。
- 7 貞享五年(一六八八) 元日、直能六十七歳。
- 8 貞享三年(一六八六) 元日、直能六十五歳。
- 9 貞享二年(一六八五) 元日、直能六十四歳。
- 10 元禄二年(一六八九) 元日、直能六十八歳。
- 11・12 延宝八年(一六八〇) 元日、直能五十九歳。
- 13 延宝六年(一六七八) 元日、直能五十七歳。
- 14 天和三年(一六八三) 元日、直能六十二歳。
- 15 天和二年(一六八二) 元日、直能六十一歳。
- 16 貞享四年(一六八七) 一月二日、直能六十六歳。
- 17 貞享元年(一六八四)、直能六十三歳の頃か。
- 18・21 明暦二年(一六五六) 一月十一日、直能三十五歳。

- 22 天和四年（一六八四）元日、直能六十三歳。
- 23・24 天和二年（一六八二）元日、直能六十一歳の頃か。23『直能公御年譜』では天和四年正月御詠歌に重出。
- 25 貞享三年（一六八六）元日、直能六十五歳。
- 26・28 寛文三年（一六六三）三月、鯖岡（桜岡）逗留。直能四十二歳。
- 29 天和四年（一六八四）元日、直能六十三歳。
- 30・31 貞享四年（一六八七）三月、直能六十六歳。
- 32・33 貞享五年（一六八八）春、直能六十七歳。
- 34 延宝三年（一六七五）春、直能五十四歳。
- 35・36 延宝三年（一六七五）四月、直能五十四歳。
- 35 明暦天皇は、後西天皇（一六三七—一六八五）。『岡花二十首和歌』巻軸歌、
『八重一重』『岡花』収録歌。但し、両書の第二句は「にほひもそひて」。
- 36 聖護院の宮は、後陽成天皇第十一皇子、聖護院宮道寛法親王（一六四七—一六七六）。『岡花二十首和歌』、『八重一重』『岡花』巻頭歌。
- 37・41 延宝三年（一六七五）春、直能五十四歳。
- 37 「花は木ごとに咲て、つゝにこゝろの山をかざり、露は草葉よりおちて、ことばの海となる」という表現は『続古今和歌集』の序文に見られる。月卿雲客は公卿・殿上人。照高門主は、照高院道晃法親王。五葉は五葉松、款冬は山吹の異名。『源氏物語』乙女巻に「南の東は山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの春のもてあそびをわざとは植ゑて、秋の前栽をばむらむらほのかにまぜたり」とあるのによる。
- 40 岡山は桜岡に隣接する岡山神社。
- 42 寛文元年（一六六一）三月二日、能貨による直能（四十歳）への古今伝受が修了し、本藩第二代藩主鍋島光茂（一六三二—一七〇〇）より書翰が届いたときのもの。
- 43・46 寛文十一年（一六七二）三月、直能五十歳。
- 46 宝富は防府。愚溪居士は第二代多久邑主多久茂辰。
- 47・50 寛文十三年（一六七三）三月、直能五十二歳。轟木宿は鍋島藩の東端の国境（現鳥栖市）に位置した。
- 51・52 寛文五年（一六六五）五月、直能四十四歳。東部は東都の意か。59にも同様に「東部」とある。
- 53 万治元年（一六五八）六月、直能三十七歳。阿弥陀寺は現在の赤間神宮（山口県下関市）、安徳天皇を祀る。
- 55・58 延宝二年（一六七四）四月、直能五十三歳。
- 59・60 延宝四年（一六七六）四月、直能五十五歳。
- 61・70 寛文十二年（一六七二）五月、直能五十一歳。参勤交代で木曾路を経由したときのもの。
- 61 「かの五条あたりの夕顔のやどり」は、『源氏物語』夕顔巻の「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやし垣根になん咲きはべりける」という描写を「賤が垣ねに咲つゝく卯花」に重ねたもの。
- 63 『平家物語』巻九に描かれる熊谷直実の「あはれ、弓矢とる身ほど口惜かりけるものはなし。武芸の家に生れずは、何とてかゝるうき目をばみるべき。なさけなうもうち奉るものかな」という嘆きに基づく。
- 67 臨泉庵は、長野県木曾郡上松町にある臨川寺、寢覚の床といわれる景勝地や浦島太郎伝説などで知られる。
- ※「かの五条あたりの夕顔のやどりにも過てあわらなれば」
- 71・83 貞享元年（一六八四）、直能六十三歳。
- 71 月岡は小城郡北郷の地名。
- 84・91 延宝三年（一六七五）春、直能五十四歳。
- 91 「金王が植たる桜」は金王八幡宮（現在の渋谷区）にあった金王桜のこと。村尾嘉陵『江戸近郊道しるべ』には、「金王ざくらは、そのかみ渋谷金王丸が植ると云、其木枯たり」とある。金王丸は土佐房昌俊ともいわれるが不明。
- 92 延宝三年（一六七五）春、直能五十四歳。林家の諸学士は、林鶯峰・林鳳岡・人見竹洞・坂井伯元・林晋軒・伯庸・深尾春庵・人見卜幽軒・辻端亭等。『八重一重』巻末歌。
- 93 延宝七年（一六七九）七月四日、直能五十八歳。
- 94 明暦二年（一六五六）八月十六日、直能三十五歳。飛鳥井重相は飛鳥井雅章。
- 95 明暦二年（一六五六）八月、直能三十五歳。日野弘資（一六一七—一六八七）。
- 96・98 明暦三年（一六五七）八月初旬、直能三十六歳。
- 99・101 明暦三年（一六五七）八月十五日、直能三十六歳。
- 102 貞享三年（一六八六）八月十五日、直能六十五歳。
- 103 貞享四年（一六八七）八月十五日、直能六十六歳。

104 貞享二年（二六八五）八月十五日、直能六十四歳。
105 貞享五年（二六八八）八月十五日、直能六十七歳。
※被注語不明

106・107 元禄二年（二六八九）八月十五日、直能六十八歳。鸛崎の大徳は、鍋島家歴代藩主の菩提寺である黄檗宗祥光山星巖寺の覚潭和尚。

108 貞享二年（二六八五）八月十五日、直能六十四歳。

109 貞享四年（二六八七）九月十三日、直能六十六歳。

110 貞享五年（二六八八）九月十三日、直能六十七歳。

111・112 寛文六年（二六六六）五月、府中駅にて。直能四十五歳。

113 延宝四年（二六七六）夏、直能五十五歳。

114 慶安三年（二六五〇）十月、直能二十九歳。

115 寛文元年（二六六一）十二月三日、直能四十歳。

116・117 寛文八年（二六六八）二月頃、梅園屋敷にて。直能四十七歳。

118 万治元年（二六五八）九月二十七日、南祥院（多久茂辰娘、鍋島勝茂養女、直能正室、鶴子）一回忌。直能三十七歳。

119 寛文九年（二六六九）十二月、幻心童女（賀伊）百か日忌。直能四十八歳。

120・122 寛文十三年（二六七三）六月二十五日、緑樹院（鍋島光茂娘、土井利重室、千姫）一回忌。直能五十二歳。

123 延宝四年（二六七六）十月、高岳院（勝茂養女仁王、直能母）三十三回忌。直能五十五歳。

124 慶安三年（二六五〇）十月、高岳院（直能母）七回忌。直能二十九歳。

125 元禄二年（二六八九）八月二十六日、直能六十八歳で没した。

「桜岡二十景」「桜岡十境」は「八重一重」に収録。また、『直能公御年譜』延宝三年（二六七五）に記述あり。

「常葉園六境」は『直能公御年譜』貞享元年（二六八四）に記述あり。

延宝三年（二六七五）四月、直能五十四歳。明暦天皇は後西天皇。大猷院は徳川家光（二六〇四—一六五二）。

「肥前の国に…」以下は『岡花二十首和歌』巻末ならびに『八重一重』『岡花』巻末に収録。また、『直能公御年譜』延宝三年（二六七五）に記述あり。

「豊前国多良川」については『直能公御年譜』延宝元年（二六七三）三月に記述あり。

「臨泉庵」については『直能公御年譜』寛文十二年（二六七二）に記述あり。

「月岡」以下「滑稽亭」までの記述は『直能公御年譜』貞享元年（二六八〇）に見られる。

「落葉硯」の記述は、『直能公御年譜』延宝四年（二六七六）に見られる。照光院宮は、照高院道見法親王。